



「気づき力」アップで災害防止

■「気づき」とは何か？

「気づき」とは、問題や課題を発見し、解決するまたは成長する原動力です。

現場では、日々変わる周りの環境の変化に気づき、災害を未然に防ぐために手元・足元・周囲の状況確認をしっかり行う、声掛けを行い危険を回避するなど、安全意識の維持向上に取り組んでいます。

「気づき」には、人による感度の違いがあり、ちいさな出来事から、新しいことに気づける人もいれば、大きな出来事であっても何も気づけない人もいるかもしれません。

そして、あたかも、相手が自ら気づいたかのように、相手に気づかせることが上手な人もいます。ある出来事に遭遇しても、人の感じ方は、千差万別です。

このような気づきのばらつきは、**問題の把握と改善**に影響する大切なポイントです。

■気づきと問題意識

世の中の仕事の多くは、与えられた問題をいかに解くかということよりも、まず、なにが、問題であるかを自らで見つけることが求められます。

見誤った問題をといて、その問題の正しい答えを出しても、本質的な問題の解決にはなりません。何が正しい問題であるかということに、いかに気づくかが仕事で発生する問題解決において、非常に大切なことです。

三現主義で、**現場**で**現物**をみて**現実**を把握して、問題をとく力のある仲間をまきこみながら

考えていけば、問題を解決していくことができます。

仲間は、同僚・組織の中にいるかもしれませんが、組織の外（請負事業体、NPO等）や事務所に訪れるお客さんかもしれません。

■気づきと比較

気づきは、さまざまなものを見て、興味をもち、比較することから生まれることが多く、無意識に3つの経験・知恵・知識と比較をおこなっているのではないのでしょうか。

- ①自分が過去体験した経験との比較
- ②先輩や仲間や組織の知恵との比較
- ③書籍などから得られる知識との比較

ただし、経験や知識や知恵がなければ、気づきが得られないかといえば、そうではなく、初めての経験であっても、活用できる気づきの視点があります。

◆自然に学ぶ

自然に存在し、モノを構成する分子構造といった秩序だった並びや規則性、自然の重力など、普遍的な自然界の法則と比べて、違和感がある問題は、気づききっかけとなります。

日頃から、自然に親しみ、肌で感じていけば、人間が作り出したものに対して、たくさん気づきを与えてくれるでしょう。

◆優れたものに学ぶ

長年、歴史の中で育まれてきた建築物や技法など、美しく存在し続けているような品質の高い構造や手法を頻繁にみていると、職場に潜む問題の対象を目の前にしたとき、違和感を覚えることでしょう。

職場ばかりで気をはりつめるのではなく、休日、リラックス



しながら、美術館や伝統工芸、建築物などにふれ、品質・品位の高いものから、刺激をうけていけば、優れたものとの違いから、問題に対する気づきが生まれるでしょう。

◆新しいものに学ぶ

新規職員が採用されると、いままでとは全く異なる環境で、さまざまな気づきがあります。

長年働いていて、現状の姿が当たり前のようになっている等、なにひとつかわらない日常の現場でも、新規職員にとっては、大きな変化と気づきの場となります。

何も知らない新規職員の強みは、先入観なく、ありのままに、現状を見ることが出来る力をもっていることです。

経験や知識がないからこそ、ありのままに感じた気づきを現場に与え、刺激と変化をもたらすことができます。

■五感で気づく

気づきは、人間の五感で感じて、心が動き、考えることから生まれます。

現場を歩いて、五感をはたらかせれば、さまざまな変化に気づくことでしょう。

『五感』

- 聴覚… 普段は聞こえない異音
- 嗅覚… 泥臭いような独特のにおい
- 触覚… 手のひらに付くほどのほこりや汚れの付いた手工具
- 視覚… 急に薄暗くなった空模様
- 味覚… (食品のわずかな味の違い)

このような現場でのわずかな変化に対して、だれもが気がつけるように、問題点、ヒヤリ・ハット等を共有します。

五感をはたらかして、問題に気づくだけでも十分ではなく、その後にしなければならぬことは、**改善**のアクションです。気づいても何も

しなければ、改善にはつながりません。問題に気づき、次の行動をとって、問題を改善したことを最後まで、フォローアップしていくことも、欠かせないことです。

■現場の気づき『3M』

業務の中では、「むり・むだ・むら」の『3M』に着眼すれば、気づきも多くなります。

「むり」をして、仕事に疲れたり、「むだ」な作業で、余計な手間がかかったり、「むら」があり、見た目が乱雑な状態が、職場にあふれていないでしょうか。

このような「むり・むだ・むら」の『3M』は、改善の種となります。

逆に、『3M』がない状態は、業務での理想的な状態になるので、比較して考えるとわかりやすいでしょう。

- ①むりせず、らくに、
- ②むだなく、効率的に、
- ③むらなく、美しく、

私たちは、日頃の生活で、このような感覚的によいと感じ取れることは、現場でも業務でも、よい改善の取り組みとなる場合が多いものです。

■組織の気づき自らで気づきを増やす

自分では、気づいていても、周りには気づかれていないことを、同じ失敗を繰り返さないために、組織の知識・知恵として、タイムリーに反映できているでしょうか。

現場で、気づかせることが上手な人は、質問が上手な人です。自分が知っていることであっても、あえて、現場のメンバーに声をかけ、聞くことを大切にしています。

優れた人は、あえて、自分で答えをだすことをさけて、相



手に質問をして、答えを考えてもらう中で、大切な「気づき」を共有しています。

質問された仲間は、自らの問題として、なぜ、そうなるのか？なぜ？なぜ？という原因追究の中で、疑問が、興味にかわり、さまざまなことに気づいてくれるでしょう。

組織での気づきを増やすためには、職場の中でどのような役割を果たしているのかということをしつかりと理解してもらうことが大切です。

■見えないことへの気づき

現場の不安全箇所など、問題は見えていないものばかりではありません。見えていない問題を見つけ、みんなに気づかせることも大切です。

目に見えていない問題を見ようとすると、問題を顕在化する努力は、将来おこりうる潜在的な大きな問題を予測し、先手、先手で解決する大きな仕事につながります。

気づく力のある人は、思いやりをもって接することができるといわれています。

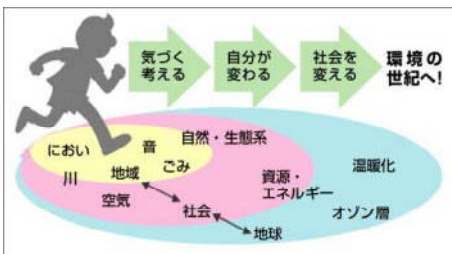
思いやりのある人のいる環境で育まれば、『気づき力』の高い人材が育ち、質の高い安全対策や業務での処理がうみだされるのではないのでしょうか。

■気づき、気づき、気づき

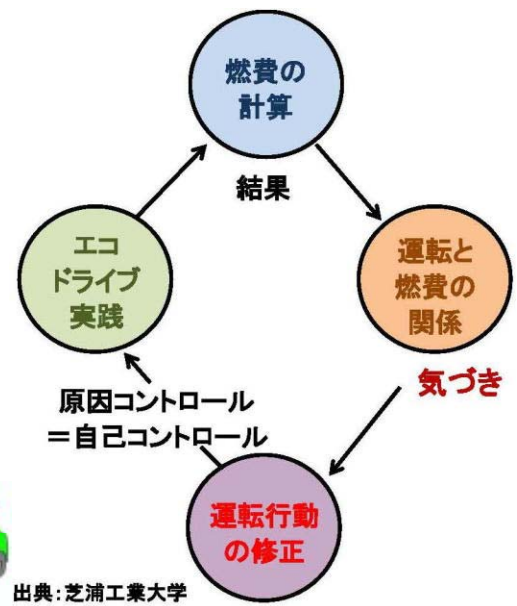
自分に気づく  
相手に気づく  
世の中に気づく  
本当に大切なことが見えてくる

自然にこころが揺れ始める  
それが気づき。

気づきとは気づくこと。  
気づきとは気づくこと。  
ありのままに感じてみましょう。



運転における「気づき」の効果



出典：芝浦工業大学

- エコドライブ10のすすめ
- ①ふんわりアクセルeスタート  
優しい発進を心がけましょう
  - ②加減速の少ない運転  
車間距離は余裕をもって、交通状況に応じた安全な定速走行に努めましょう
  - ③早めのアクセルオフ
  - ④エアコンの使用を控えめに
  - ⑤アイドリングストップ  
無用なアイドリングをやめましょう
  - ⑥暖機運転は適切に
  - ⑦道路交通情報の活用
  - ⑧タイヤの空気圧をこまめにチェック
  - ⑨不用な荷物は積まずに走行
  - ⑩駐車場所に注意  
渋滞等を招く、違法駐車はやめましょう
- これらを実践することが、安全運転に通じます。※エコドライブ普及連絡会制定

発行 兵庫森林管理署 健康安全協議会